

かなり前のことです。ある信徒の方との何気ない会話の中で、その方はこんなことを仰いました。それは、ご自身の召された後のことでもあります。自分のお墓には墓碑銘として「信じ、祈り、生きた」と、そう刻んで欲しいということでした。そして、その言葉に私はハッとさせられたのです。それは、揺るぎない信仰というものがあるとしたら、それはどういうものなのだろうか、そう考えていた頃のことだったからです。そして、ハッとしたのは、揺らぐ、揺らがない、という、この信仰の一面に過ぎないものに捕らわれていることに気がつかされたからです。それゆえ、そこでまた思わされたのです。それは、信仰とはただ生きること、それも主と共に生きること、そういうものであるということです。ですから、そう考えるなら、信仰とは、一人称で語られるべきものであって、あなた、彼、彼女という視点で語られるものではありません。あるのは、私、私たちの信仰でしかなく、ただ、その場合の信仰とは、私、私たちに従属するものではありません。イエス・キリストと共にあるところから始まるものであり、それゆえ、私、私たちとはつまり、イエス様と共に生きる私、私たちであるということです。

そこで今日も御言葉に聞いて参りたいのですが、御言葉はその冒頭で「そのとき、イエスはこう言われた」とこう語ります。それは、この日の御言葉がその直前を受けてのものであるからです。そして、そこで知らされることはイエス様の荒々しい姿です。しかし、私たちが見ているものはそれだけではありません。人に対するイエス様の深い眼差しであり、その眼差しが私たち一人一人に注がれているということです。ですから、そこで忘れてはならないことは、イエス様が自分の感情に溺れ、ただ怒りに任せるようなお方ではないということです。また、神様の御心の内に沈み込み、そこから一歩も出ようとしなないお方でもないということです。イエス様というお方は、私たちの生きるこの世界の中で私たちと共に、私たちと同じところにしっかりと立ち、そこに根を張って生きておられる方

だからです。しかし、その上で申し上げると、今日のところは、そうであるがゆえにまた、非常に分かりにくいものでもあるのです。なぜなら、直前にあることを念頭に置くなれば、冒頭で語られているイエス様の祈りの言葉は文脈にそぐわないように思えるからです。それは、直前に記されていることはイエス様の伝道の明らかな失敗であり、ですから、気持ちの高ぶりはそれゆえのことでもあります。ところが、それにも関わらず、ここでイエス様は、「『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます』」と神様の御名を褒め称え、感謝の祈りを献げているのです。

ですから、先週の箇所もそうでしたが、一難去ってまた一難、ここに記されていることを通して先ず言えることは、イエス様の仰ることが分からない、つまりは、私たちの理解を大きく超えているということです。それだけではありませぬ。何か誤魔化されているようにも思えるからです。しかし、だからといって、適当に読み飛ばすわけにも参りません。特に、今日の箇所は、私たちにとっては、特に重要なイエス様の言葉が記されているからです。ですから、なおのことそうなんだと思うのです。そして、その言葉とは、私たちすべてが知っている「疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私の下に来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから。」というこのイエス様のお言葉です。しかも、イエス様のこのお言葉を私たちは単に知識として知っているだけではありません。ここでそのように語られていることは言葉の上だけのものではなく、私たちが経験として知っているものだからです。そして、その経験とはつまり、イエス様と共にあるがゆえの平安、安息です。従って、イエス様がその祈りの直後に「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです。父よ、これは御心に適うことでした」と仰ることは、私たちが現にその安息に与っていることを、誰でもないイエス様ご自身がそのことを心から喜んでおられるということです。そして、それが許されているのは、私たち

が賢く、この世の知恵に長けているからではありません。「幼子のように」未熟であり、非力であり、頼るべき存在なくして私たちが生きることのできない者であるからです。ですから、イエス様がユダヤ社会に生きていたことを考えるならば、このことはまた、私たちにとってのイエス様の一つの姿を伝えてくれているように思うのです。

ここで、賢い者、知恵あるものと言われている人はユダヤ社会における宗教的権威のことであり、このことはつまり、私たちのイエス様とは、立派な衣を着て、高いところからあれこれ指図するようなお方ではないということです。それゆえ、イエス様は、権威を振りかざして宗教的熱心さ、真面目さを説き、それを強く求めることもありません。つまり、私たちのイエス様とは、自分は知っている、分かっていると自信満々に何かを語り、私たちを縮こませるようなお方ではないということです。ですから、ここからは次のように言うことができます。それは、私たちは、自分は何も分かっていない、知らないといった具合に、自分を卑下することはない、できないということです。それが、ここで「幼子のような者」と言われていることであり、つまりは、それがこの場にある私たちであるということです。

従って、この前提に立って、この日のみ言葉に聞いていくなら、その伝道の失敗にもかかわらず、イエス様がこうして神様に感謝の祈りを献げていることはおかしなことではありません。そういうことがあったとしても、イエス様にはそういう私たちが与えられているわけです。ですから、ここで感謝の祈りはそのためのものであって、むしろ、そうであればこそなおさらそう思うのですが、そのように私たちが与えられているがゆえに、イエス様はそのことを何よりも喜んでおられるということです。そして、それは、イエス様が自らの失敗を棚上げしているからではありません。失敗は失敗としてあるわけで、失敗をその相手に押しつけ、あたかもそれがなかったようにほっかむりしているわけではないからです。それをこうしてきちんと言葉にしているということがそういうことだと思いののですが、ただだから、このイエス様の失敗を通して、私たちはある大切な一つのことを知らされるのです。それは、失敗を失敗として受け止めればこそ、そこには必ず道が開かれるということ、で

す。まただから、道が開かれることでその喜びも一入大きなものとなるのです。そして、誰でもない、そのことを身をもってここで現しているのが私たちのイエス様であり、さらにいえば、それを徹底して明らかにしたものがイエス様の十字架と復活の出来事でもありました。

しかし、私たちはイエス様の十字架と復活の場面に直接遭遇したわけではありませんが、けれども、その出来事については間違いなく知っているのです。それは、何度も言いますが、経験としてそのことを知っているからです。そして、それが、ここでイエス様が仰る、私たちが疲れを覚え、息も絶え絶えにいるその時であり、喘ぎあえぎ重荷を負っているその時です。その時、私たちは、生きて私たちと今共にあるイエス様を経験するのですが、それは、その時、私たちが神様の支えと導きとを強く感じることになるからです。しかし、それは、同時に、それ以前に私たちが神様を見失う経験をすることです。ですから、そういう意味では、ここでのことはただ一回的であって十字架と復活の出来事の意味を先取りして、イエス様が身をもってそのことを私たちに伝えてくれているということです。なぜなら、イエス様にとっての伝道の失敗は、神様の全能さが解消されたかに見えるものでもあるからです。そして、それは、神様の独り子であられるイエス様が私たちと同じように無力であったからです。ですから、このことはまた、イエス様が「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と、十字架の上でこう仰ったその姿と重なり合うようにも思います。しかし、だからこそまた、私たちはイエス様の御前で安心して嘆くことができるし、安心して不満をぶつけることができるのです。まさに、幼子のように、お母さん、お腹がすいた、お父さん、助けてと、安心してその思いのすべてをぶつけることができるのです。それは、そのイエス様が今私たちと共にあり、その私たちのことを足下から支えてくださっているからで、イエス様が共にあるということは、そういうことでもあるからです。

ですから、ここから見えてくることは、どういふものなのでしょう。直前でイエス様が問題視していることは「悔い改め」ということでもありましたが、悔い改めた者の姿とは、今申しました通り、まさにイエス様と共にあることに心から安心していうこと、それゆ

え、悔い改め、イエス様との関係性に心から安心して居る人たちの間には差異や違いはありません。つまり、そこには、体の大きな者も小さな者も、優秀な者も優秀だと見なされない者も、善良な者も爪弾きにされている者も、身分の高い者も低い者も、イエス様から見れば、そこにはまったく違いはなく、同じであるということです。まただから、皆が皆、イエス様に向かって安心して、ありったけの声を叫ぶことができるのですが、それは、イエス様が人間的な物差しで私たちのことを推し量りはしないからです。ですから、これは私たちにはなかなかに口にするのでないことだと思ふのですが、そうであるからこそ、イエス様は「私は柔和で謙遜な者だから」と、堂々と、そして、はっきりと、ご自分についてこう言葉にされたのです。ですから、私は、このイエス様のお言葉には嘘がないと思います。もし、それが嘘だったとしたら、救われる者は一人もいないことになり、何より、私たちが無理にでもそう思わなければならないとしたら、そもそもそのところで、私たちの信仰はカルトと言われているものと違いがないことになってしまふからです。なぜなら、もし、イエス様の仰ったことが、こうすれば、こうなる、さもなければ、こうなるぞと、そのように人を脅し、言いなりにさせ、あるいはまた、人と人とを切り離すためのものであるとしたら、それこそ、この「私は柔和で謙遜な者だから」と仰ることは嘘以外の何ものでもないことになるからです。

そこで、少し横道に入ることをお許しいただきたいのですが、それは、今話題になっている旧統一教会についてです。それについては、皆さんもよくご存知のことと思いますが、そこで今、気になっていることが報道で用いられているその文言等についてです。そこでは、私たちが普段から当たり前のようによく用いている言葉が、旧統一協会を批判するために使われているのですが、例えば、教会、献金という言葉です。ただ、もちろん、メディアでの使われ方については十分に理解できますし、批判的であることは当然のことだと思ふます。しかし、今申しました二つの言葉は、私たちにあってはとても大切な言葉であり、そういう意味で、その使われ方、理解のされ方については、私たち自身が身をもって世に明らかにする責任があるのです。ですから、今起こっていることについては、私たちは

毅然とした態度で臨まなければなりません。そして、その場合の毅然とした態度というのは、それについて普段から自分の言葉で信仰についてきちんと語り、それができるといふことであり、旧統一教会を批判するだけで終わってはならないということです。そして、このことはまた、私たちが教会に集められている喜びを、献金を献げることへの喜びを私たちがしっかりと現すということでもありますが、ただし、それは言葉の上だけのことではありません。むしろ、言葉だけで表そうとすると返って誤解を与えかねないことにもなるようにも思ふのです。それは、言葉で説得し、納得を得ようとするのと、どうしても自分の主張ばかりが目立ち、押しつけがましいことにもなるからです。なぜなら、私たちの言葉を相手がどう思うかは、聞いたその相手に委ねられているわけで、一生懸命な余り押しつけがましいものになっては、返って逆効果なことにもなりかねないからです。ですから、そこで問われることは、今こうなったからなんとかしなければ、ということではありません。私たちの普段からのそのあり方、受け止め方が問われているのであって、そういう意味では、私たち自身がイエス様と共にあることに、普段から本当に安心して、心から喜んでいるかが問われているということです。

そこで、御言葉に戻りたいのですが、そのためにイエス様が私たちに求められることが、イエス様の轡を負うということです。そして、この轡であります。それは、牛や馬をしっかりと繋ぐために用いられる棒のようなものです。それゆえ、その使い方によっては、悪い意味で理解されることにもなるのでしよう。つなぎ止め、縛り付け、好き勝手は許されないぞ、さもなければ、地獄に落ちる、祟りがあるぞと、そういう意味合いで理解されかねないものでもあるからです。しかし、もちろん、私たちは、このイエス様の轡をそのように理解してはおりません。イエス様にしっかりと繋がっていることが、そのまま安息に繋がることを知っているからです。そして、そこで大事なことは、轡を私、私たちが負う負わなないということではありません。轡を負うことで私たちはどんな経験をすることになるのか、ということです。それがイエス様に学ぶということでもあります。けれども、それは、聖書の一言一句を疎かにせず勉強しなければならないということではありません。勉強というその言

葉が示すように、勉強は、強いて勉めるということ、人間的な努力を強調するものです。けれども、イエス様がここで学びなさいと仰ることは、人間的な努力を強制し、能力の向上を図らねばならないということではありません。ただ、もちろん、だから寝ていればいいということでもありません。イエス様が仰ることは、イエス様の真似をすること、模倣です。トマス・ア・ケンピスの「キリストに倣いて」という、宗教改革以前に記された古い本がありますが、「イミタチオ・クリスティ」、キリストを模倣するということが私たちにとっての軛であり、学ぶということなのです。そして、それは、イエス様が身に負うたその低さ、卑しさを我が事とするということでもありますが、それを私、私たちが実際に見よう見まねでもなんでもいいのです。それをやってみること、それが大切なのです。それは、それがそのまま私たちにとっての生きるということにも繋がることになるからです。ただし、それは、これは私なりの言い方になりますが、それほど仰々しいことではないと思います。

生きるということとは確かに大変なことです。信じることと生きることとがそのまま繋がっているとは到底思えないことが多いからです。けれども、私たちにとって信じることと生きることとは、十字架と復活の出来事がイエス様というお方を通して一つであるように、イエス様を信じる私たちにとっては、そのままイコールであるのは間違いのないことなのです。しかし、だからといって、私たちの上より不確実なものが取り除かれるということではありません。こうすればこうなる、こうしないとこうなってしまう、人生において私たちが味わうであろう様々な不確実性を、これらのものをこうすれば取り除かれるとそう言って人に近寄ってくるものとは違って、ちょうどイエス様がそうであったように、この不確実なものによって翻弄されるのが私たちでもあるのです。ですから、そういう意味で神様もイエス様も、不確実なものを取り除いてあげると、その場しのぎのお為ごかしを語ることはありません。それは、カルトと言われる集団が共依存関係を築き、その人のことをいいようにコントロールするのを目的としているのとは違って、この不確実なものに対する私たちの開かれた態度こそが、私たちを本当の意味でその命を生きるにふさわしいものとするからです。まただから、イエス様

は今日の最後のところでこう仰るので、「そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである」と。そして、それは、私たちがイエス様を信じるという軛に繋がり、その生涯においてイエス様に学ぶ、模倣するというその荷を負えばこそ、私たちはその生涯を平安の内に全うし、御国において生きることと信じることとがそのまま直接繋がっていることを知ることができるからです。ただし、そのためには、こうしてこの世に生きる私たちには一つのことが求められています。

先ほど、イエス様の軛につながり、その荷を負うことはそれほど仰々しいものではないと申しましたが、生きるということと信じるということがそのままイコールで繋がっていくために必要なことは祈りです。それは、信じることと生きることを繋げるものがこの祈りに他ならないからです。ただし、そこで問われることはその行為、言葉の選び方ではありません。大切なことはイエス様が私たちと共にあることです。だから、今こうして一緒にいるイエス様に向かって私たちは祈ることができるのです。どこにいるのかも分からないものに向かって祈りを献げることはできないからです。それは、ルターが不確実なものに数多く囲まれた時ほど長く必死になって祈ったと言われているように、不確実なものの中にあって唯一確実なものが祈るということでもあるからです。ですから、祈りを軽んじることは許されません。けれども、それは、仰々しいものではなく、私たちがこうしてイエス様と、そして、兄弟姉妹と、この共にある関係性の中で、こうして共にある暮らしを私たちが続けていくなら、祈りは自ずと身についていくものでもあるからです。それゆえ、信じることと生きることがしっかりと繋がっているためにも、祈りは欠かすことのできないものなのですが、それは、神様の造られた世界で、神様によって与えられた命に生きる私、私たちにとって、祈りは神様とイエス様の御心を知らしめるものであり、私たちが安心して生きる上での根拠を与えるものでもあるからです。祈りましょう。